第 2 章　接続表現の表現類型と因果関係の度合いとの関わり

第 1 章では、日本語の「条件文」の分類と中国語の「主従複文」の分類について述べた。また、日本語の因果関係を表す「から・ので・ため(に)・て」文の先行研究と、中国語の「因果複文」に関する先行研究を整理し、概観した上、本研究の位置づけについて述べた。本章では、因果関係を表す複文における接続表現の表現類型と因果関係の度合いについて検討し、論述する。

日本語の接続表現の使用は従属節と主節の因果関係の度合いと深く関わっていると思われる。「から」、「ので」、「ため（に)」、「て」を用いる文の因果関係の度合いは決して同じではないと考えられる。また、同じ接続表現を使用する文であっても、従属節と主節の構文要素や文の性質によって、因果関係の度合いが違ってくることも予想される。

一方、中国語においては、接続表現の表現類型によって、従属節と主節の因果関係の度合いが異なってくることが考えられる。用いられる接続表現が論理的かつ説明的であれば、前・後節の因果関係の度合いが強くなる。逆に考えると、用いられる接続表現の論理性が薄ければ、因果関係の度合いが弱くなると予想される。

本章では、まず両言語の接続形式の類型について述べ、そして、接続表現と因果関係の度合いとの関わりについて見ていくことにする。

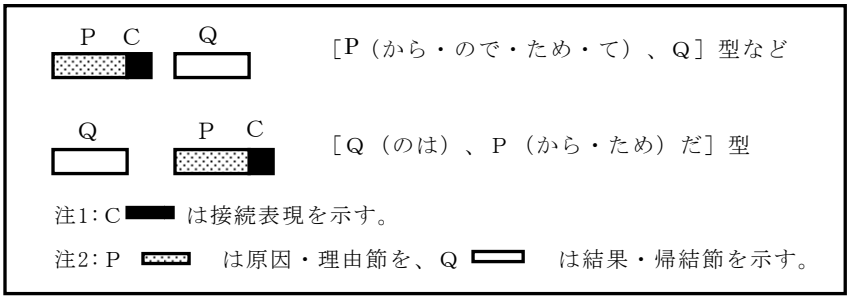
2.1 因果関係を表す複文における両言語の接続形式の類型

日本語の因果関係を表す複文の構文形式は、基本的には「Ｐ（原因・理由）、Ｑ（結果・帰結）」という構造になっているものが多いが、場合によって、原因・理由を強調する効果を出すために、［Ｑ(結果・帰結)、Ｐ（原因・理由）］という構造になっているものもある。同様に、中国語の因果関係を表す複文もこの２種類の構造パターンになっている。しかし、同じ構造パターンを持っているが、接続形式はまったく違う形式になっている。以下、それぞれの接続形式を図示した上、各接続形式の働きについても論じる。

2.1.1 日本語の接続形式の類型

日本語の接続形式の類型は単一のパターンになっており、接続表現の位置も基本的に固

定されている。図で表示すれば、以下のようになる。



【図7】日本語の接続表現の表現類型

日本語の接続形式は、接続表現が従属節に後接されるのが基本的な表現形式である。また、原因・理由節を強調するための分裂文の「題⇒述」構文、つまり「結果・帰結から原因・理由をたどる」構文には「～のは、～からだ」、「～のは、～ためだ」という表現形式がある。

2.1.2 中国語の接続形式の類型

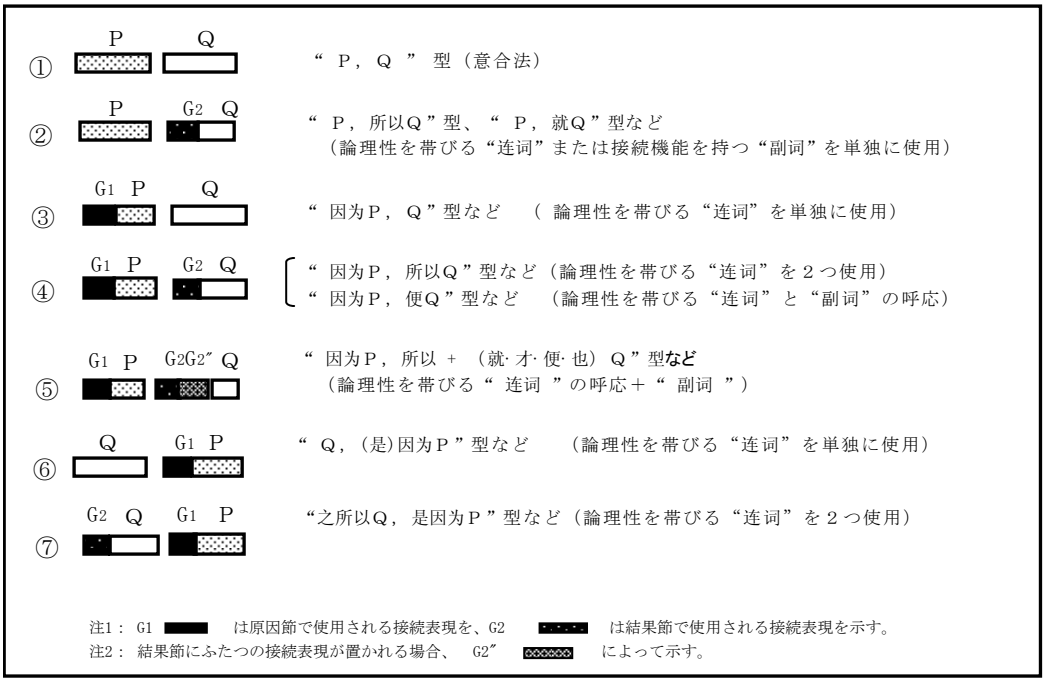
中国語の接続形式の類型はバラエティに富んでいると言える。従属節のみ、または主節のみに接続表現が置かれる場合もあれば、ひとつの複文に複数の接続表現が置かれる場合もある。さらに、因果関係が語順および前後節の内容によって判断され、接続表現が使用されない場合もある。中国語では接続表現を使用するか否かは極めて自由であるが、接続形式によって、表されている因果関係の度合いが違ってくると思われる。また接続形式だけではなく、接続表現には論理性を帯びるものと単なる接続機能を果たすものの 2 種類があるため、因果関係の度合いはそれとも深く関係している。日本語の「から・ので・ため（に）・て」を中国語に翻訳する場合、そのまま中国語の接続表現で置き換える「有標」のものと、接続表現を使用しない「無標」のものに大別される。ここで、まず収集したデータより観察された日本語の「から・ので・ため（に）・て」に対応する表現を一覧表にまとめ【表 9】に示す。

【表9】「から･ので・ため（に）・て」に対応する中国語表現一覧表

A				B	
番　号	訳　語	番　号	訳　語	番　号	訳　語
A-1	因为･･･	A-51	･･･由此	B-1	･･･就
A-2	因为･･･才	A-52	･･･由此可见	B-2	･･･便
A-3	因为･･･便	A-53	因为･･･而	B-3	･･･也
A-4	因为･･･就	A-54	･･･致使	B-4	･･･又
A-5	因为･･･也	A-55	是因为･･･才	B-5	･･･使
A-6	因为･･･使	A-56	正因为･･･	B-6	･･･才
A-7	因为･･･所以	A-57	･･･而	B-7	･･･令
A-8	因为･･･因而	A-58	之所以･･･	B-8	･･･只得
A-9	因为･･･以至	A-59	正由于･･･所以	B-9	･･･只好
A-10	因･･･	A-60	由于･･･结果	B-10	･･･还是
A-11	因･･･又	A-61	因为･･･于是	B-11	･･･毕竟
A-12	因･･･便	A-62	既然･･･当然	B-12	･･･当然
A-13	因･･･才	A-63	因为･･･当然	B-13	･･･只有
A-14	因･･･遂	A-64	･･･从而	B-14	･･･使得
A-15	由于･･･	A-65	･･･结果	B-15	･･･这才
A-16	由于･･･便	A-66	之所以･･･因为	B-16	･･･总算
A-17	由于･･･也	A-67	因为･･･结果	B-17	･･･连
A-18	由于･･･所以	A-68	由于･･･于是	B-18	･･･不得不
A-19	由于･･･因而	A-69	･･･是因为	B-19	･･･倒
A-20	由于･･･因此	A-70	･･･从而	B-20	･･･倒是
A-21	既然･･･	A-71	是･･･而	B-21	･･･弄得
A-22	既然･･･就	A-72	･･･是由于	B-22	･･･只能
A-23	既然･･･也	A-73	只是因为･･･才	B-23	･･･便是
A-24	既然･･･又	A-74	是由于･･･才	B-24	･･･幸好
A-25	既然･･･那么	A-75	･･･是	B-25	･･･幸而
A-26	既然･･･所以	A-76	由于･･･才	B-26	
A-27	既然･･･可见	A-77	･･･终于（副詞）	B-27	
A-28	既然･･･还是	A-78	由于･･･就	B-28	
A-29	既･･･	A-79	由于･･･只好	B-29	
A-30	既･･･便	A-80	所以･･･就是因为	B-30	
A-31	既･･･那么	A-81	因为･･･只好		
A-32	只因	A-82	因･･･而		
A-33	只因･･･才	A-83	･･･所以才		
A-34	只是･･･才	A-84	由于･･･使		
A-35	･･･因而	A-85	因为･･･因此		
A-36	･･･所以	A-86	･･･所以又		
A-37	･･･因此	A-87	就因为･･･		
A-38	･･･于是	A-88	由于･･･终于		
A-39	･･･那么	A-89	既然･･･那		
A-40	･･･以至	A-90	･･･以致才		
A-41	･･･可见	A-91	･･･所以就		
A-42	･･･为此	A-92	既･･･就		
A-43	所以･･･是因为	A-93	因为･･･这才		
A-44	之所以･･･是因为	A-94	因为･･･所以才		
A-45	之所以･･･是由于	A-95	由于･･･所以才		
A-46	正因为･･･所以	A-96	既然･･･便		
A-47	正因为･･･因此	A-97	･･･至使		
A-48	正因为･･･才	A-98	是因为･･･所以		
A-49	正因为･･･便	A-99	因为･･･只能		
A-50	就因为･･･才				

注：Aは因果関係を表す機能を持つ"連詞"を含む接続類型であり、　Bは副詞のみか他の品詞による接続類型である

中国語の先行研究を踏まえながら、日本語の「から・ので・ため（に）・て」に対応する中国語の接続形式の表現類型を分類すると、以下のように図示できる。



【図8】中国語の接続形式の類型

【図 8】に示したように、中国語における接続形式の類型は 7 種類になっており、主に典型的な接続表現としての“连词”[1)]と“关联副词”[2)]の 2 種類の接続表現が使用されているが、因果関係を表す“连词”が単独に使用されているものは、複数の“连词”が使用されているものより因果関係の度合いが低いと想定できる。また、“连词”のみ、或いは“关联副词”のみ用いられている場合と、前後節ともに“连词”が用いられているもの、或いは“连词”と“关联副词”を呼応させて用いられているものの場合、同じ類型であっても、接続表現によって、表された因果関係の度合いが違ってくる場合もありうる。つまり、表現類型によって、表された因果関係の度合いが異なってくるだけではなく、同じ表現類型とはいえ、接続表現の機能によって示されている前後節の因果関係の度合いも異なってくることがありうる。

以上、両言語の接続形式の類型について見てきた。形の上では異なる部分が非常に大きいが、意味的には両者の重なりがかなり大きいということが想定される。以下、両言語の接続形式の類型と因果関係の度合いとの関わりについて検証を試みる。

2.2 日本語における接続形式の類型と因果関係の度合いとの関わり

2.2.1 接続形式の類型についての細分類

因果関係を表す接続表現に関する研究では、相互の使い分け、意味用法、使用条件を巡って論述されたものが多くあるが、それぞれの表現によって表された因果関係の度合いの違いについて書かれたものは非常に少ない。蓮沼（2001）[3] では、原因・理由を表す「から・ので・て」の意味用法、使用条件、または相互の使い分けについて論じられているとともに、これらの表現によって表された因果関係のニュアンスの違いについて次のように指摘している。

> テは、ある出来事Ｘがきっかけとなって、話し手に生じた感情変化をそのまま述べるときに使われます。「Ｘの結果、そのことに対して私はＹと感じる」といった意味のもので、これはカラ・ノデのように、因果関係を明示的に述べる表現とは異なります。
> （中略）
> テは、Ｘの後にＹが起こるという、事柄の継起関係を表すのが基本で、カラ･ノデのような積極的な因果関係は表さない。

于（2000）[4] では、「タメ・シテ」は「カラ・ノデ」とは違って、日本語の因果表現を、従属節事態が主節事態より以後に発生する場合に、文として成立できない「継起的」な表現と、従属節の出来事が主節より以後に発生しても、文として成立できる「非継起的」な表現の２種類に分けられると主張している。また、「継起的」に発生する表現と認められる「タメ・シテ」の相違について多角的に検討し、以下のように記述している。

> 「タメニ」文は因果関係を表面に押し出して従属節と主節の役割の明晰化を重視する表現に対して、「シテ」文は、継起関係を表面に押し出して、因果関係は意味的関連性に頼る。
> (中略)
> 「タメニ」文が形態的に因果関係を明確に示しているのに対して、「シテ」文は因果関係の表出が従属節と主節の意味的関連性に委ねられるという点で異なっている。

于(2000)によると、「ために」文は因果関係を明示的に表すものであるのに対して、「て」文は因果関係を明示的に表せないものだととらえることができるだろう。この点に関しては、于(2000)は上掲した蓮沼の観点と一致している。

実際にこれらの論点より前に、寺村（1981）[5)]は、既に「て」形自体に「理由」の意味があるのではなく、前件・後件の意味関係からそのように解釈できる場合があるということにすぎないということを指摘している。

以上の論点によれば、「から・ので・ため(に)・て」文の因果関係の度合いの相違に関しては、現時点で明らかに2種類になっていることがわかる。つまり、「から・ので・ため(に)」は前後節の因果関係を明示的に示すものであり、「て」は前後節の因果関係を明示的に示すことができないものだということである。しかし、このような分類は、まだ不十分であるように思われる。実際に同じ表現を使用する文であっても、構文順序または構文要素によって、因果関係の度合いが必ずしも同じレベルにあるとは限らない。そこでこのような考えを元に、典型的な構文における原因・理由を表す「から・ので・ため（に）・て」について、構文順序と構文要素を考慮しながらさらなる検討を試みる。ここで言う典型的な構文とは、原因節はひとつであるもののことを指す。つまり、因果関係を表す複文においては、構造的にもっとも単純なものである。

単なる原因・理由を表す「から・ので・ため（に）て」文は、文末のモダリティ形式と共起するものを含まず、それぞれの表現類型については【表10】のように示すことができる。

【表10】単なる原因・理由を表す「から・ので・ため(に)・て」の表現類型の細分類

接続表現	表現類型		特徴
か ら	「ＰＣ、Ｑ」型	Ｐから、Ｑ	原因・理由を強調する要素を含まず
		Ｐから、Ｑのだ	原因・理由を強調する要素を含む
	「Ｑ、ＰＣ」型	Ｑのは、Ｐからだ	構文順序による原因理由を強調する
た め	「ＰＣ、Ｑ」型	Ｐため、Ｑ	原因・理由を強調する要素を含まず
		Ｐため、Ｑのだ	原因・理由を強調する要素を含む
	「Ｑ、ＰＣ」型	Ｑのは、Ｐためだ	構文順序による原因理由を強調する
の で	「Ｑ、ＰＣ」型	Ｐので、Ｑ	原因・理由を強調する要素を含まず
		Ｐので、Ｑのだ	原因・理由を強調する要素を含む
て	「Ｑ、ＰＣ」型	Ｐて、Ｑ	原因・理由を強調する要素を含まず
		Ｐて、Ｑのだ	原因・理由を強調する要素を含む

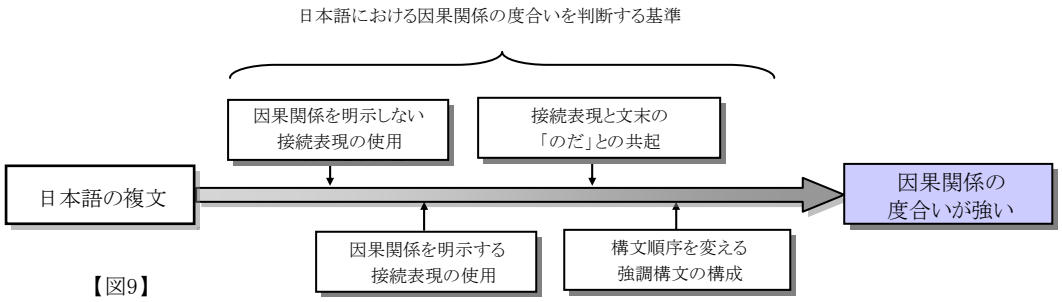
注：「Ｐ」は原因、「Ｑ」は結果、「Ｃ」は接続表現を表す

【表 10】によると、「から」と「ため(に)」には単なる原因・理由を表す文における接続表現の表現類型として、「ＰＣ、Ｑ」「ＰＣ、Ｑのだ」「Ｑ、ＰＣ」の 3 種類があることがわかる。「ＰＣ、Ｑ」型においては、「から・ので・ため（に)・て」は、それぞれ原因・理由を強調する要素が含まれているものと含まれていないものがある。ここで、3 種類の接続形式の類型の因果関係の度合いの相違について実例を通して見てみる。

分析に入る前に、用例番号の示す方法を説明しておきたい。用例を提出する際に、言語と関係せず、掲示順序によって番号を付ける。なお、混乱を招くことを避けるため、番号の閉じ括弧を分けて表示する。日本語原文は（　）を、中国語原文は［　］を使うことにする。また、中国語による用例を挙げる際、それが原文か訳文かを問わず、原因節と結果節の前に小文字で(因)と(結)を付け、それぞれ原因節と結果節の位置を示す。

2.2.2 接続形式の類型による因果関係の度合いの相違

日本語において因果関係の度合いの強弱について判断する場合、その判断基準に関しては、接続表現自体の機能、構文順序、強調要素の有無といった点を考慮する。これを図示すると、【図 9】のようになる。



【図9】

2.2.2.1 原因・理由を強調する要素が含まれていない場合

原因・理由を強調する要素が含まれていない場合、「ＰからＱ」、「ＰのでＱ」、「Ｐため(に)Ｑ」、「ＰてＱ」といった因果関係を表す複文がもっとも典型的な表現類型となる。

(1) 体は発熱のため焼けるように熱い。　『黒』

(2) 一本、二本と徳利の数は重って、時雄は時の間に泥の如く酔った。　『布』

(3) そのはなしにそそのかされて、登美子はひとりで見に行った。　『青春』

(4) おれは様子が分らないから、博物の教師と漢学の教師の間へ這入り込んだ。　『坊』

(5) 江藤賢一郎は授業がないので、自宅から一歩も出なかった。　『青春』

(6) 眠くなったからぐうぐう寝てしまった。　『坊』

(7) その夜、昼間眠ったので八千代は眠れなかった。　『あ』

(1)～(7)の「ため」文、「から」文、「ので」文、「て」文の中にいずれも原因・理由を強調する要素が使用されておらず、主観的または客観的な意味合いを抜きにして、それぞれの文の前後節の因果関係の度合いについて言えば、「から・ので・ため」によって示した前後節の因果関係は明示的であるので、前後節の因果関係の度合いははっきりしていることがわかる。しかし、「て」を使用した文は、「て」自体には前後節の因果関係を明示化させる機能が含まれておらず、前後節の因果関係は前後節の内容から読み取るので、因果関係の度合いは「から・ので・ため」文より弱いと言える。

2.2.2.2　原因・理由を強調する要素が含まれている場合

(8) 悪い事をした覚はないから何も隠れる事も、恐れる事もないのだが、　『吾』

(9) 生憎、聖夜は年末だから、ダフネの主人も平生よりは儲けることを熱心に心掛けねばならないのだ。　『挽』

(10) 重松のうちは、ちょっとした丘の高みにあるために、好太郎さんのところのように筧の水を引けないのだ。　『黒』

(11) 衣笠山はひくいために、孤峯庵のうしろの藪は風をまともにうけてななめにしなうのである。　『雁』

(12) 危いので、舟に乗せることができないのだ。　『あ』

(13) 狸は大方腹鼓を叩き過ぎて、胃の位置が顛倒したんだ。　『坊』

(14) 私は失職していたので、この見物は私にとって最も適切なるものであったのだ。　『夢』

(15) わたしがすねてしまったので、彼がさっさと頼信紙を使ったのである。　『挽』

(8)～(15)の用例の「から・ので・ために・て」はいずれも文末の「のだ」と共起しており、「Ｐから、Ｑのだ」「Ｐので、Ｑのだ」「Ｐために、Ｑのだ」「Ｐて、Ｑのだ」といった表現類型になっている。この種類の文は「から・ため(に)・ので・て」と文末の「のだ」を共起することによって、「から・ため(に)・ので・て」節が焦点化され、原因・理由が際立てられているため、前後節の因果関係の度合いは一段と強調されている。

「のだ」と共起している「て」文の因果関係の度合いは「Ｐて、Ｑ」より高いが、これと「Ｐから・ので・ため（に)、Ｑ」と比べて、どちらが因果関係の度合いが強いかという点については判断しにくい。そもそも度合いの判断基準を非常に設定しにくいので、同じ接続形式の類型の場合は、「から・ので・ため（に)」文は勿論「て」文より因果関係の度合いが高いと言えるが、異なる接続表現を使用し、接続形式の類型が異なる場合、ある構文要素の影響作用を受けるものと、受けていないものと比べると、やはり結論づけがたい。ここでは同じ接続表現を使用する異なる接続形式の類型のものの間における因果関係の度合いの相違と、異なる接続表現を使用する同一接続形式の類型における因果関係の度合いの相違について述べるにとどめる。

2.2.2.3 構文順序による原因・理由を強調する場合

複文の構文順序は基本的には、「Ｐ、Ｑ」の原因から結果をたどる構文になっているが、ある効果を生み出すために、順序を変える場合もある。

(16) 近在の人びとの口の端にのぼったのは、竹の名所だったからである。　『越』
(17) 二年前、手の悪いわたしが、仕事の内容も考えずに久田幹夫の誘いを簡単に承知したのは、当時彼がわたしの唯一の友人であったからだ。　『挽』
(18) 人が花や鳥獣を愛するのも、其等の物を擬人化して眺めるからである。　『あい』
(19) けれども自然の美しいのは、僕の末期の目に映るからである。　『末』
(20) それが経済的価値をもつようになったのは、人口過剰のためだ。　『青』
(21) せまい土地にクロチクなどのめずらしい小藪までもっていたのは、細工物に必要だったためである。　『越』

「Ｑのは、Ｐからだ」構文は、構文順序を変えることによって、「から・ため」節それ

自体に焦点が置かれていることになり、一種の強調構文になっている。この種類の構文は、「Ｐから、Ｑのだ」構文と同様に原因節が焦点化されているが、「Ｐから、Ｑのだ」構文の「から」節は、文末の「のだ」の作用を受けて、そういった効果が生み出される。それに対して「Ｑのは、Ｐからだ」構文は、倒置法によって「から・ため」節自体に焦点が置かれ、他の構文要素の影響を受けないので、因果関係の度合いが一層強く押し出される。つまり、「Ｐ（から・ために）、Ｑのだ」接続形式の類型による原因節の焦点化は間接的なものであり、「Ｑのは、Ｐ（から・ため）だ」接続形式の類型による原因節の焦点化は直接的であると考えられる。このように、「Ｑのは、Ｐ（から・ため）だ」構文は、「Ｐから、Ｑのだ」構文より、因果関係の度合いが一段と強いと言える。

2.3 中国語における接続形式の類型と因果関係の度合いとの関わり

2.3.1 接続形式の類型とその働きについて

中国語では、いままで先行研究において、日本語と同様に接続形式の類型と因果関係の度合いとの関連性に関する研究がほとんどなされていないが、邢（2001）[6)]では、複文における“关联词语”の機能について以下のように分類し述べられている。

> 从动态的角度看，即从关系词语的运用过程看，对于隐性的逻辑基础来说，关系词语的作用有四种：一是显示，二是选示，三是转化，四是强化。“显示”“选示”“转化”或者“强化”，指的都是由语里到语表的动态过程。
>
> 動態的な観点から、すなわち関連詞語の運用過程から見、劣勢であり、その論理的基礎について言えば、関連詞語の機能には 4 種類ある。それは顕示、選択表示、転化、強化である。「顕示」「選択表示」「転化」そして「強化」はいずれも言語の内面から外面へという動態過程を指している。

邢(2001)による“关联词语”の使用と機能について簡単に説明すると、以下のようになる。

① 顕示：ある形式によってある関係を示す。

［22］ (因)因为屋子冷，(結)江华不住地搓着两只大手。 《青春》

部屋の中が寒いので、江華はたえずごつい両手をこすっていた。　　『青春』

［22］は“因为Ｐ，Ｑ”形式によって、［屋子冷］と［江华不住地搓着两只大手］の間の因果関係を表している。実際に(22)では、［屋子冷］と［江华不住地搓着两只大手］の間にはそもそも因果関係が存在している。“因为Ｐ，Ｑ”形式を使用して、節と節の関係を明示するのである。

② 選択表示：ある形式によって、選択的に複数ある関係の中の一種を示す。

［23］他不理我，我也就不理他。　　（自作）

［23］は前後節の関係を示す接続表現が使用されていないので、前後節の関係は多様に理解することができる。

［23’］　(因)因为他不理我，(結)所以我就不理他。
　　彼がわたしを無視しているから、わたしも彼を無視している。
［23”］　如果他不理我，我就不理他。
　　彼がわたしを無視するなら、わたしも彼を無視する。
［23’”］只要他不理我，我就不理他。
　　彼がわたしを無視などすると、わたしも彼を無視する。

話者の理解と意図によって、接続表現を選択する。このような場合は「選択表示」と言う。［他不理我］を事実である原因・理由だとすると、“因为……所以（就）”[7]を選んで、前後節の因果関係を明示する。［他不理我］をまだ事実になっていないことの仮定条件だとすると、“如果……就”を選択し、前後節の仮定関係を明示する。［他不理我］をある特定の条件だとすると、“只要……就”を選択し、前後節の条件関係を示す。上例のように、異なる接続表現を選択して異なる意味関係を示すのが選択表示だということである。

③ 転化：ある特定の形式によってある関係を転化する。

［24］ 如果JAL的机票便宜的话，我坐JAL的飞机回国。　　（自作）

JALのチケットが安いなら、わたしはJALの飛行機で帰国する。

［24］は接続表現の“如果”を用いることによって、前後の節の関係が仮定関係であると明示されている。

［24’］(因)因为JAL的机票便宜，(結)所以我坐JAL的飞机回国。

JALのチケットが安いから、わたしはJALの飛行機で帰国する。

前後節の表現内容は同様でありながら、異なる接続表現を使用することによって、前後節の関係が違ってくる。　［24’］では“因为‥‥‥所以”によって、前後節の関係が(24)の仮定関係から［24’］の因果関係に転化されている。

④ 強化：ある特定の形式によって既にある形式によって示された関係を一層明示する。

［25］(因)因为剧团里缺小生，(結)他便又转了小生。　　《钟》

劇団に二枚目が少なかったことから、そっちのほうに役柄をかえた。　　《鐘》

［25］では“因为‥‥‥便”[8]を使用することによって、前後節間の本来から潜んでいる意味合いを表面に押し出し、明示化している。このように既に明示化されている因果関係を一層明らかにするために、［25’］のようにさらに接続表現を加える。

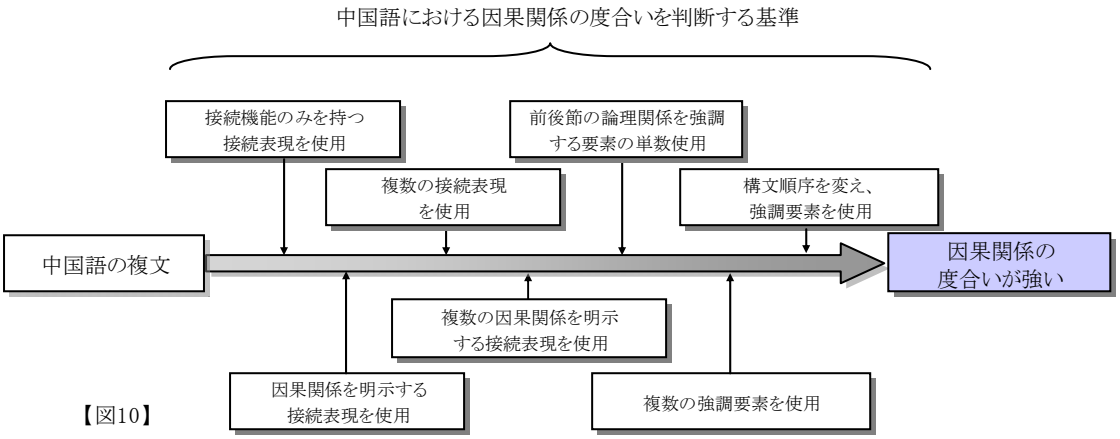
［25’］(因)因为剧团里缺小生，(結)所以他便又转了小生。

［25’］では、結果・帰結を表す接続表現の“所以”を加え、既に“因为‥‥‥便”によって明示されている因果関係をさらに強め、明示化している。

以上、邢(2001)による接続表現の使用と働きについて簡単に説明した。邢の記述によると、中国語では、前後節の表現内容に対して、異なる意味関係を表す接続表現を使用すると、意味関係が変わってくることがわかる。また、前後節の意味関係を一層強める場合、接続表現の使用は、既にある表現形式を用いた上、さらに接続表現を加えるといった表現

方法がある。つまり、一文では、接続表現の数が多ければ多いほど前後節の関係が強められ、一層明らかになるということであろう。邢(2001)による接続表現の機能についての分類はとても興味深く、詳細な分析に至っていないが、本節で述べる中国語の接続表現の使用と因果関係の度合いとの関連性について、分析する手掛かりが提示されている。

本節では、中国語の接続形式の類型と因果関係の度合いとの関わりについて検討するにあたって、接続形式の類型だけではなく、接続表現の機能も念頭に置くことにする。たとえ同じ類型であっても、使用する接続表現には因果関係を表す機能を持つ“连词”と、単なる接続機能を持つ“关联副词”があるので、機能の違いによって表された因果関係の度合いも異なってくると考えられる。さらに、接続表現がある文要素の影響を受け、因果関係の度合いが強まることにも注目する。このように中国語の因果関係の度合いの強弱についての判断基準は、接続表現の機能、接続表現および強調要素の数、構文順序といった点を考慮する。これを図示すると【図 10】のようになる。



【図10】

2.3.2　接続形式の類型による因果関係の度合いの相違

2.1.2 の中国語の接続形式の類型図によると、中国語の接続形式はまず接続表現を使用する「有標」のものと、接続表現を使用しない「無標」のものの 2 種類に分けることができる。さらに接続表現を使用するものにおいて、構文順序は「原因から結果へ導く」ものだけではなく、「結果から原因をたどる」ものもある。ここで、2.1.2 の【図 8】によって示された 7 種類の接続形式の類型について順番に分析してみる。また、客観性を求めるため、中国語の表現類型について述べる際、日本語原文に対する中国語対訳である用例を取

り上げるのではなく、中国語が原文であるものを取り上げ、日本語訳文を付加する。

2.3.2.1 接続表現を使用しない“P，Q”型

接続表現を使用しない“P，Q”表現類型は中国語では普遍的な表現形式だと言える。前後節の因果関係を前後節の表現内容から読み取り、因果関係の度合いを明示しない。

［26］(因)渴极了，(結)先用手捧着喝了几口河水，　《青春》

渇ききっていたので、まず河水をすくって飲んだ。　『青春』

［27］(因)加以进了几回城，(結)阿Q自然更自负，　《呐喊》

それに彼は､何度か城内に行っているので、自尊心が強くなるのも当然であった。

『呐喊』

［28］(因)“那时候工人吃香，(結)你还看得起我。·····”　《人啊》

「あのころは労働者がもてはやされてたから､あんただってあたしに一目おいてたわよね。･･･」　『ああ』

［29］(因)接受以往的教训，(結)我一再追问了他的政治状况、家庭状况。　《人啊》

過去の教訓があるから、私は彼の政治的境遇や家庭環境を根掘り葉掘りたずねた。

『ああ』

［30］(因)喉咙好象被什么卡住了，(結)叫不出声来。　《北京》

咽喉が何かに押さえ付けられて声にならないようだ。　『北京』

［26］～［30］は何れも接続表現が使用されておらず、前後節の意味関係を表現内容から読み取る“P，Q”といった表現類型になっている。接続表現は使用されていないが、そもそも前後節の間に因果関係が存在していることが分かる。しかし、前後関係を明示する接続表現が用いられないため、従属節と主節の関係が明示されておらず、因果関係の度合いが弱いと言える。

これらの文には接続表現を使用できないわけではなく、話し手または書き手の表現意図によって省略されていると考えられる。これらの文では、原因節に原因・理由を表す接続表現の“因为”を用い、“P因为，Q”といった接続類型とすると、前後節の因果関係が示

され、前後節の因果関係の度合いも自然に上がるだろう。前後節ともに因果関係を表す接続表現が置かれ、“因为Ｐ，所以Ｑ”といった接続形式となると、前後節の因果関係が一層明確となり、前後節の因果関係の度合いも一層高くなると言えよう。

2.3.2.2　主節のみに接続表現が単数使用される場合

主節のみに接続表現が使用される場合、因果関係を表すものと、接続機能のみを果すものの２種類に分けられる。

［31］(因)恂如对于太太不满意，(結)所以心里不能闲，　《霜》
恂如は女房が気に入らないものだから、いらいらしている。　『霜』
［32］(因)墙外一副明棋不够用，(結)于是有人拿来八张整开白纸，很快地画了格儿。　《棋王》
場外では展示用の大型の将棋盤一枚では足りないので、誰かが全紙大の紙を八枚もってきてすばやく線を引いた。　『チャン』
［33］(因)她不愿意自己的缘故教别人麻烦，(結)因此不让史夫人跟着前去。　《缀》
彼女は、自分のことで他人に迷惑をかけたくはなかったので、史夫人にいっしょに行ってもらうことは断った。　『巣』
［34］(因)要到北平来没有路费，(結)他就偷坐在煤车上，藏在煤堆当中。　《青春》
北平に来るにも旅費がないので、石炭車にしのびこみ、石炭の山の中に隠れてきた。　『青春』
［35］(因)我怕我支持不住，(結)便站起来在房间里来回走动。　《人啊》
我慢できなくなると困るので、立ち上がって部屋の中を歩き回った。　『ああ』

上掲用例の主節にはいずれも接続表現が使用されており、“Ｐ，G_2Ｑ”接続形式の表現類型となっている。[31] [32] [33]はそれぞれ結果・帰結を表す接続表現の“所以、因此、于是”[9] が使用されている。“所以”“因此”は単なる因果関係を表すものであり、“于是”は因果関係を表すと同時に継起関係も表すものである。機能的な違いはあるが、使用される言語環境が異なっているだけであり、いずれも前後節の因果関係を示す機能を持つものである。したがってこれらを使用する場合、いずれも前後節の関係が示され、因果関係の度合いが強くなると言える。

一方、接続機能のみを果す“关联副词” の“就／便”[10] を使用する ［34］［35］は、因果関係を表す“所以”などを使用する文より、前後節の因果関係の度合いが低いと言える。というのは、“就・便”は前後節をつなげる働きを持つが、前後節の意味関係を示す機能を持たないためである。因みに“就／便”を使用する場合、前後節の関係は表現内容によって示す。とは言え、“就・便”を使用するものと、接続表現を使用しないものの因果関係の度合いが同一レベルのものだとは言えない。前後節の関係をつなぐ機能を持つため、“Ｐ，Ｑ”型より前後節の結びつきの度合いが強いことが考えられ、因果関係の度合いも“Ｐ，Ｑ”型よりやや強いと言えるだろう。

2.3.2.3　従属節のみに接続表現が使用される場合

［36］(因)我因为她讲的题目相当大，(結)沉吟了片刻，没有回答。　《天云》

彼女の問いかけは大問題なので、私はしばらく考えこんで答えずにいたが、《天雲》

［37］来之前，(因)因为没有活动经费，(結)他常常是饥一顿饱一顿的过日子。　《青春》

ここに来るまで、活動費がないため、かれはいつもくうやくわずですごしてきた。

『青春』

［38］(因)由于公共汽车极少，(結)人们上班、出门主要是步行。　《当》

公衆バスが少ないため、人々は通勤や、でかけるとき主に歩く。　（拙訳）

［39］(因)就是因为四十多了，(結)这日子过下去将难于收拾。　《读》

もう四十過ぎたのだから、このような暮らしを続けていてはどうにもならないのだ。

（拙訳）

［40］(因)正是因为他坚持了这些观点，(結)他的问题不但没有解决，在‘文化在革命’中又进一步升级了。　《天云》

彼がこの見方を堅持したからこそ、彼の“問題”は解決されるどころか、文化大革命中にはまた一段と“昇格”してしまったのです。　『天雲』

［36］～［40］は従属節のみに原因・理由を表す接続表現の“因为”と“由于”が用いられており、“G1Ｐ，Ｑ”といった接続形式の類型になっている。［36］［37］［38］の接続表現は何の影響も受けておらず、単なる従属節と主節の関係を示しているのに対して、［39］［40］は接続表現の前にそれぞれ原因・理由を強調する要素の“就是／正是”[11] が使用されて

いることによって、原因・理由が際立てられている。したがって、他方からの影響作用を受けていない“Ｐ因为，Ｑ”型と、他方からの影響作用を受ける“就是(正是）因为Ｐ，Ｑ”型と比べると、前後節の因果関係の度合いが異なっていることがわかる。

他方からの影響作用を受け、原因・理由が際立てられたことによって前後節の因果関係の度合いも自然に強められている [39][40]は、何の影響作用を受けない[36][37][38]より前後節の因果関係の度合いが強いことが認められよう。このように、同じ表現類型、同じ接続表現であるが、文要素の違いによって表された因果関係の度合いが異なってくることもありうる。

なお、従属節のみに接続表現を使用する表現類型と、主節のみに接続表現を使用する表現類型の因果関係の度合いがどのように違っているかというと、非常に判断しづらく、単純には言い切れない。従属節に接続表現が使用される場合、原因・理由に多少重点が置かれており、主節に接続表現が使用される場合、結果に多少重点がおかれているとしか言えない。ここでは、同じ機能を持つ接続表現を使用する異なった接続形式の類型間の因果関係の度合いの相違と、異なる接続表現を使用する同一接続形式の類型間における因果関係の度合いの相違について述べるにとどめたい。

2.3.2.4　従属節と主節ともに接続表現が使用される場合

従属節と主節ともに接続表現が置かれる場合、従属節と主節にそれぞれひとつの接続表現を使用する表現類型と、原因・理由を表す接続表現と、複数の結果・帰結を表す接続表現を呼応させて使用する表現類型の２種類がある。これは【図８】の④番の“G_1Ｐ，G_2Ｑ”型と、⑤番の“G_1Ｐ，G_2G_2…Ｑ”型にあたる。

［41］(因)因为时间还早，(結)他们就在车站外面的一片空地上并肩漫步着。　《青春》

まだ時間があるので、停車場の外の空地を散歩した。　『青春』

［42］(因)由于他跟邓小平有过许多接触，(結)便饶有兴味地翻阅起来。　《作家》

彼は鄧小平とよく接触したことがあるので、興味深く閲覧し始めた。　(拙訳)

［43］(因)因为惦记着晚上的七点钟，(結)所以她没有心绪和他多谈　《青春》

今晩、七時の脱出のことが心を占めているので、長話をする気にはなれなかったのだ。

『青春』

［44］(因)因为道静已挨晓燕说了许多次，(結)所以这次决心瞒住她。　《青春》

暁燕から、これまでなんども忠告されているので、かの女は相手をだまそうと思ったのだ。　『青春』

［45］(因)我因为有过饥饿的经验，(結)所以特别渲染了故事中的饥饿感觉。　《棋王》

ぼくも飢餓の経験を持っていたので、この小説のなかの飢餓の感覚を人ごとと思えないところがあったのである。　『チャン』

［46］(因)“正是因为我爱你，(結)所以我才叫你再想一想。”　《老舎》

「愛しているからこそ、あなたにもう一度考えてもらったんだ。」　（拙訳）

［47］(因)因为自觉跟别人不一样，(結)所以就不敢跟别人接触，这是自卑心理造成的一种孤独状态。　《读》

他人と違うと感じているから、他人と接触する勇気がないのである。これは劣等感が引き起こした孤独な状態なのだ。　（拙訳）

［48］到了晚年，(因)由于女王非常宠爱埃塞克斯伯爵，(結)所以就把这枚戒指赐给了这位伯爵。　《读》

晩年になってから、女王はエセックス伯爵を非常に寵愛していたので、この指輪を伯爵に授けた。　（拙訳）

上掲用例の中では、“G_1P，G_2Q”接続形式の表現類型と、“G_1P，$G_2G_{2'}Q$”接続形式の表現類型の２種類が含まれている。(41)～(45)は“G_1P，G_2Q”型であり、[46][47][48]は“G_1P，$G_2G_{2'}Q$”型である。同じ“G_1P，G_2Q”型に属するものであっても、接続表現の機能的な違いによって、前後節の因果関係の度合いが異なってくる。[41][42]は原因・理由を表す“因为、由于”[12]と、接続機能のみを果す“关联副词”の“就”と呼応して使用されているのに対して、[43][44][45]は従属節と主節ともに因果関係を表すものが置かれている。“因为Ｐ，就Ｑ”“由于Ｐ，就Ｑ”表現形式の場合は、原因・理由を表す“因为、由于”によって前後節の因果関係が示され、“就”によって前後節の結びつきの度合いが強められている。“因为Ｐ，所以Ｑ”表現形式の場合は、前後節の接続表現には接続機能と因果関係を表す機能があるため、それらが使用されることによって、前後節の結びつきの度合いが強くなると同時に、因果関係の度合いも強められる。したがって、“因为Ｐ，就Ｑ”表現類型によって表された因果関係の度合いは、“因为Ｐ，所以Ｑ”表現類型より弱いと言える。

[46][47][48]は主節に複数の接続表現が使用されており、“G_1P，$G_2G_{2'}$Q”型になっている。(46)は従属節にある原因・理由を表す“因为”と、主節にある結果・帰結を表す“所以”、節と節の論理関係を強める機能を持つ取り立て副詞の“才”と呼応して使用され、さらに、“因为”の前に原因を際立たせる機能を有する“正是”も使用されている。“正是因为P，所以才Q”表現類型では、因果関係を表す接続表現の“因为”“所以”を使用した上に、複数の強調要素の“正是””才”も用いられているため、前後節の因果関係の度合いはこれまで分析してきた表現類型の中で、もっとも高いものだと言える。

[47][48]も“G_1P，$G_2G_{2'}$Q”型であり、“因为P，所以就Q”と“由于P，所以就Q”表現類型が使用されている。因果関係を表す複数の要素と接続機能を果す要素が含まれており、因果関係の度合いと前後節の結びつきの度合いが一段と強められていると言える。しかし、前後節の因果関係を際立たせる要素が含まれていないので、“因为P，就Q”“由于P，就Q”“因为P，所以Q”といった表現類型より、表された前後節の因果関係の度合いが強いが、“正是因为P，所以才Q”より弱いと言えよう。

2.3.2.5 結果から原因をたどる構文の場合

結果から原因をたどる構文の場合、接続形式の類型は【図 8】の接続⑥番の“Q，G_1P”型と、⑦番の“G_2Q，G_1P”の２種類が観察される。

[49] (結)我们之所以羡慕他人，(因)是因为他人拥有我们没有却又渴望拥有的东西；　《当》
われわれが他人のことをうらやましがるのは、われわれは持っていないが、持つことを切に望んでいるものを他人が持っているからである。　(拙訳)

[50] (結)物价之所以上升，(因)是因为货币发行量超过了客观需要。　《人民》
物価が上がったのは、貨幣の発行量が客観的な需要量を越えたからである。(拙訳)

[51] (結)目前相当一批国有企业之所以搞得不好，(因)在很大程度上是由于管理落后。　《人民》
近頃かなり多くの国営企業がうまくいっていないのは、管理の水準が大変遅れているからである。　(拙訳)

[52] (結)他佩服村长张金发，(因)是因为张金发曾经在歪嘴子那样一个刁钻刻薄的地主手下当过打头的。　《金光》
かれが張金発村長に敬服しているのは、張金発が、「口まがり」のような酷薄な地主の

もとで作男頭をつとめたことがあるからだ。　『輝け』

(53) (結)他不敢再在街市上走，(因)因为他卖了阮明。　《骆》

彼はとうてい表通りに足を向けることができなかった。なぜかといえば、彼は阮明を売ったのだ。　『駱』

[49][50][51]は“G_2Q，G_1P”型であり 、それぞれ“之所以Q，是因为P” 、“之所以Q，是由于P”といった接続形式の類型が使用されている。この種類の表現形式は原因節と結果節が倒置されることによって、原因・理由節が強調された上、さらに原因・理由を表す接続表現の前に、原因・理由を強調する機能を持つ要素が使用されている。「強調構文＋強調要素」といった表現類型となるので、前後節の因果関係の度合いが極めて強いと言える。

[52]は“Q，G_1P”型であり、従属節に原因・理由を表す接続表現が使用された上に、原因・理由を強調する要素の“是”も用いられており、主節にある“之所以”が省略されているため、前後節の関係は “是因为”のみによって表されていることとなる。これも、「強調構文＋強調要素」といった表現類型であるが、“G_2Q，G_1P”の“之所以Q，是因为P”より、因果関係の度合いが低くなると言える。

[53]は、従属節と主節が倒置されることによって、情報の焦点は原因節にあると言えるが、原因・理由を強調する要素が使用されていないため、後ろの原因節は単なる結果節に対する補足的かつ説明的な存在となり、原因・理由を強調する構文だと見なせない。このように、従属節と主節の因果関係の度合いは単に“因为”によって示されているだけで、「強調構文＋強調要素」の[50][51][52]より弱いことがわかる。

2.4 因果関係の度合いによる日中両語の対応関係

これまで、日中両言語それぞれの接続表現と因果関係の度合いとの関わりについて検討してきたが、本節では、2.2 と 2.3 で得られた結果をさらに裏付けるため、因果関係の度合いによる日中両語の対応関係について観察してみる。

日本語を中国語に訳す場合、使用される接続表現自体の機能や接続の表現類型によって、対応する中国語の接続類型が変わってくる傾向がある。

(54) 風の少ない旭川に住みなれて、夏枝は台風を忘れていた。 『氷』

(因)在这没有风的旭川住久了，(結)夏芝已经把台风给忘了。

(55) 頭が出ていては起こされる時に迷惑だと思って、かくもぐり込んだのであろう。『吾』

(因)他大概是讨厌一露头就会被叫起床来，(結)因此才将头缩进去， 《我》

(56) 「はい。ごいっしょに帰りたいと思って、お電話してみましたの」 『山』

“都很好。(因)我想跟您一起回去，(結)所以才给您打电话试试的。” 《山》

(57) 忠平は母屋を覗いて玉枝をさがしたが姿はなかったので、小舎に入った。 『越』

忠平朝正屋探望了一下， (因)不见玉枝的身影，(結)于是走进小屋。 《越》

(58) 熱と光がバケツの内側で反射してその量を増したので、胡瓜を変色させたのだろうか。

『黒』

(因)由于热和光从水桶的内侧反射过来，增加它的热量， (結)所以才使黄瓜变色的吗？

《黒》

(59) 亡父と単なる知己ではないように思えたので、喜助は勇気をだしてきいたのだった。

『越』

(因)喜助觉得她同父亲的关系不像是单纯的好朋友关系， (結)所以才鼓起勇气这么发问的。

《越》

(60)「この曲いちばん好きだから、とくにそうしてるの。……」 『ノル』

“(因)因为我最喜欢这支曲， (結)才特意这么做的，……” 《挪》

(61) 気狂が人の頭を撲り付けるのは、なぐられた人がわるいから、気狂がなぐるんだそうだ。

『坊』

(61a) 好比一个疯子打破了人家的头，他可以说，(因)都是因为被打的人不好，(結)疯子才打他的。

《哥①》

(61b) 疯子打了别人的脑袋，(因)是因为被打的人不好， (結)所以疯子才打的。 《哥②》

(61c) 也就是说疯子之所以打人的头，(因)是因为被打者不好，(結)才招到疯子打的。 《哥③》

(62) 今まで僕が君に電話もしなかったのは、君の気持が落着くまでと思っていたからです。

『挽』

(結)这以前我之所以没给你打电话，(因)是因为想等到你镇定下来再说。 《挽》

(63) 献身から来た一種の自信があるために、女の心はゆるがなかった。 『青』

(因)因为出于一种献身的信心， (結)她始终不动摇。 《青》

因果関係を明示的に示す機能を持たない「て」が中国語に訳される場合、対応する中国語表現類型は「無標」の“Ｐ，Ｑ”型が多い。しかしながら、「Ｐて、Ｑのだ」のように、文末に「のだ」をつけると、原因節が焦点化され前後節の因果関係の度合いが強くなるため、対応する中国語の表現類型は「有標」になりやすい。(54)(55)(56)の日本語の原文ではそれぞれ「て」が使用されているが、(54)には原因節を強調する要素が含まれておらず、因果関係の度合いが弱いため、それに対応する中国語の訳文も因果関係の度合いが弱い表現類型になっている。一方、(55)(56)の「て」は文末の「のであろう」「の」と共起しており、原因節が強調されている。それらに対応する中国語表現類型は因果関係を表すものだけでなく、節と節の論理関係を強める機能を持つ取り立て副詞の“才”も使用され、原因節が際立てられているため、原文と同じく因果関係の度合いが強くなっている。(55)にはさらに、原因を強調する“是”も使用されている。(57)～(63)は因果関係を明示する機能を持つ「から、ので、ため(に)」が使用されているが、文には原因節を強調する要素の有無や構文順序によって、対応する中国語表現類型が異なってくる。(57)と(63)は強調要素が使用されていないため、対応する中国語表現においても、単なる因果関係を明示する機能を持つ接続表現が使用されている。(58)～(61)の原文では、「ので、から」はそれぞれ文末の「のだろうか」「のだった」「の」「んだ」と共起し、原因節が焦点化されているため、対応する中国語表現類型においても原因節を強調する要素や原因節を際立たせる要素が用いられている。(62)の原文は構文順序を変えた「Ｑ、Ｐ」型であり、原因節が強調されている。それに対応する中国語表現類型は“G_2Ｑ，G_1Ｐ”型の“之所以Ｑ，是因为Ｐ”であり、構文順序が変えた上、原因を強調する要素も用いられている。

中国語の因果関係を表す複文では、接続表現が省略されることが多いが、上掲用例の日中両語の対応関係を見ると、因果関係の度合いが強い日本語を中国語に訳す場合、原文の意味合いを的確に伝えようとすれば、接続表現だけではなく、他の文成分の手助けも借りて意味上の等価性を求めようとしていることがわかる。つまり、因果関係の度合いが強ければ強いほど、日中両語の対応性が高いということである。

2.5 まとめ

2.2 と 2.3 で日本語と中国語の接続形式の類型による因果関係の度合いについてそれぞれ検討してきた。その特徴をまとめると、以下のようになる。

日本語の場合

日本語の接続形式の類型は因果関係を明示化するものと、因果関係を明示化する機能を持たないものの 2 種類に大きく分けられる。ただし、厳密に見れば、同一接続表現を使用する場合、構文要素または構文順序によって因果関係の度合いが違ってくることがわかる。日本語は形態を重視するため、接続表現または因果関係を強調する要素の使用は形態的であるのが特徴であり、形態に拘るため、接続形式の類型は多様化できないのである。

中国語の場合

一方、接続表現について機能的な面を考慮しながら中国語を分類すると、因果関係を表すもの、因果関係を表すと同時に継起関係も表すもの、因果関係を表す機能を持たないが接続機能を持つものの 3 種類に分けることができる。

中国語は接続表現の使用を必要としない場合も多いため、使用するものと使用しないものの前後節の因果関係について言うと、当然、接続表現を使用するほうが前後節の因果関係の度合いが高いと言える。また、中国語は接続表現の使用は形態的な制約を受けないので、従属節と主節の構造について見ると、単純な構文においても、接続表現の使用が一つか二つ、あるいは二つ以上のもののいずれのケースもありうる。さらに、一文では前後節の因果関係を強調する要素の使用は単数であるものと複数であるものの何れの場合もある。前後節の構成順序を変える場合にも、接続表現の使用が単数であるケースと複数であるケースがあり、強調要素があるものもないものもある。このように中国語の接続形式の類型は多様化されており、日本語より複雑であることがわかる。しかし、両言語は前後節の因果関係の度合いを強める手段としては、形式的な違いはあるものの、類似したところが少なくない。

日本語では、前後節の因果関係の度合いが強いか否かを判断する場合、接続表現が因果

関係を明示する機能を持つものであるか否か、または原因節を強調する成分が使用されているか否か、そして構文順序がどのようになっているかによって判断する。一方、中国語は接続表現が因果関係を表す機能を持つものであるか否か（因果関係を明示する機能を持つものであるか否か）、接続表現の数の多寡、強調成分の有無と多さ、構文の順序によって判断する。

以下、ここまでの分析とまとめに基づき、両言語の接続形式の類型と因果関係の度合いとの関連性を、【表 11】と【表 12】に示す。

【表11】日本語の接続形式の類型と因果関係の度合い

	から			ため			ので		て	
	「Q、PC」	「PC、Q」		「Q、PC」	「PC、Q」		「PC、Q」		「PC、Q」	
	「Qのは、Pからだ」	「Pから、Qのだ」	「Pから、Q」	「Qのは、Pためだ」	「Pため、Qのだ」	「Pため、Q」	「Pので、Qのだ」	「Pので、Q」	「Pて、Qのだ」	「Pて、Q」
因果関係	明示	明示	明示	明示	明示	明示	明示	明示	非明示	非明示
強調要素	あり	あり	なし	あり	あり	なし	あり	なし	あり	なし
構文順序	倒置	標準	標準	倒置	標準	標準	標準	標準	標準	標準
各接続表現内の因果関係の強さ	強 ←→ 弱			強 ←→ 弱			強 ←→ 弱		強 ←→ 弱	

注：「C」は接続表現を表す

【表12】中国語の接続形式の類型と因果関係の度合い

		“G2Q、G1P”	“Q、G1P”		“G1P、G2G2″Q”			“G1P、G2Q”		“G1P、G2Q”			“G1P、Q”		“P、G2Q”		“P、Q”
		之所以…是由于之所以…是因为など	…是由于…是因为など	…因为	正是因为…所以才正由于…所以才	正是因为…所以就正由于…所以就など	因为…所以就由于…所以就など	正因为…所以	由于…所以因为…所以など	正因为…才就因为…才など	正因为…便	因为…就由于…便因为…便など	正因为…就是因为…など	因为…由于…因为…など	…所以…因此…于是など	…就…便…便など	–
接続表現	接続表現有無	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	なし
	因果関係	明示	明示	明示	明示	明示	明示	明示	明示	明示	明示	明示	明示	明示	明示	非明示	非明示
	接続表現の数	複数	ひとつ	ひとつ	複数	複数	複数	複数	複数	複数	複数	複数	ひとつ	ひとつ	ひとつ	ひとつ	–
	複数接続表現の種類	因果+因果	–	–	因果+因果+接続	因果+因果+接続	因果+因果+接続	因果+因果	因果+因果	因果+接続	因果+接続	因果+接続	–	–	–	–	–
強調要素	強調成分有無	あり	あり	なし	あり	あり	なし	あり	なし	あり	あり	なし	あり	なし	なし	なし	なし
	強調成分数	ひとつ	ひとつ	–	複数	ひとつ	–	ひとつ	–	複数	ひとつ	–	ひとつ	–	–	–	–
構文順序		倒置	倒置	倒置	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
各類型内の因果関係の強さ		強	強 ←→ 弱		強 ←→ 弱			強 ←→ 弱		強 ←→ 弱			強 ←→ 弱		強 ←→ 弱		弱

注1：「因果」は、因果関係を表す機能を持つ接続表現を意味する。

注2：「接続」は、因果関係を表す機能を持たず、接続機能のみを持つ接続表現を意味する。

注

第 2 章

1) “关联词语”の一種である。フレーズや節などをつなげる成分として使われる。“连词”自体には具体的な意味合いを持たず、単なる文法的な意味を示しているだけである。

2) “关联词语”の一種であり、接続機能を持つ“副詞”のことである。

3) 蓮沼（2001：121-123）参照。

4) 于(2000:208-226）参照。

5) 寺村（1981：36）参照。

6) 邢（2001：31-37）参照。

7) 現代中国語においては、“因为Ｐ，所以Ｑ”は因果関係を表す複文の代表的な標識である。そして、“因为Ｐ，Ｑ”型と、“Ｐ，所以Ｑ”型が“因为Ｐ，所以Ｑ”型の省略形式として認められる。王维贤(1994：132）を参照。

8) 王起澜(1989：172)は “因为Ｐ、便Ｑ”は、節と節を接続し、因果関係を表す。用法としては、原因・理由を表す代表的な接続表現の“因为”を単独に使用と同様であるが、主節に“便”が使用されることによって、節間の結束性がさらに強くなり、意味関係もさらに明確になると記述している。

9) “Ｐ，所以Ｑ” 型は結果を表す。“Ｐ，因此Ｑ”型は“Ｐ，所以Ｑ” 型とほぼ同じ機能を持っている。“Ｐ，于是Ｑ”型は因果関係を表す複文の接続表現として使用されているが、“Ｐ，所以Ｑ”型などとは違い、継起関係を表す意味も含んでいる。王维贤(1994：136）を参照。

10) 王维贤(1994：137）は“就／便”は時間の前後継起を表し、二者の間に一定の関係があることを示す機能を持つが、前後節の意味関係を表せないと指摘している。

11) 邢（2001：61）は、ある強調する効果を生み出すために、“因为”の前に“就 、正”などを加え、“正因为”、“就因为”“正是因为”などのような表現方法を取ると述べている。

12) 原因・理由を表す代表的な接続表現である。“因为”は“所以”と対になって使用される場合が多いが、“由于”は原因・理由を表す標識としては、単独に使用される場合が多い。“由于”は書面語のニュアンスが比較的強い。邢（2001：63-66）を参照。